

「父が磨いてくれた靴をはいて」

富谷 とみたに 茉央 まお

私の通学用の靴は、毎週日曜日になると父が磨いてくれる。私が小学校に入学してからだから、今年でもう六年目になる。

父の靴の磨き方は、ちょっと本格的だ。ウイスキーをほんの少し容器にたらし、そのウイスキーを布にしみ込ませて靴クリームをぬり込んでいく。しばらく乾かしてから、今度は磨き布でキュッキュッと力を込めて磨いていくと、革靴は見違えるようにピカピカになる。父はこの作業を毎週末、まるで何かの儀式のようにだまってやっている。

でも最初の頃、私はこのピカピカに輝く革靴が、実はちょっと苦手だった。なぜなら、周りを見渡してみても、こんなにピカピカの靴をはいている友達はいないし、何だか私だけ違う靴をはいているみたいで、とても落ち着かない気持ちになるからだ。一生けん命磨いてくれる父には申し訳ないという気持ちはあるけれど、ピカピカ過ぎる靴を友達にからかわれたりと、恥ずかしい気持ちがい先に立ち、「こんなに毎週、毎週ピカピカに磨いてくれなくていい。ありがた迷わく！」そんな気持ちになってしまうのである。

しかし、ある週末、その時は確か父は風邪をひいて体調が悪く、熱もあったと思うのだが、寝ていた父が夕方起き出してきて、またいつものように私の靴をせっせと磨き出したことがあった。具合が悪そうな父を見て、私は、「お父さん、今日は靴

なんか磨かなくていいよ。それに、私だけピカピカの靴は恥ずかしいし……」いつもの不満から、ついそう言ってしまった。その時父は、一瞬さびしそうな顔をしたように見えただけで、「そうか……。でも、靴をいつもきれいにしておくのはとても大切な事だよ。それに、お父さんがしてやれる事は、これくらいだけだから……」そう言って、父はまただまって靴磨きに戻ってしまった。私は、その時父が見せたさびしそうな表情が、その後もずっと心に引かかっていた。

そんな事があったあくる日、父と私の会話を聞いていた母が私に、「お父さんはあなたに、いつも身なりをきちんとして、心の中までピンッと背筋を伸ばして歩いてほしいのだから」と言った。そしてそれはきつと、勉強も運動も苦手と思っ込んで、「何となく自信を無くしているように見えるあなたに対しての、お父さんなりのメッセージなんじゃないかな」とも……。その時、私はいつも反発ばかりしていた父の気持ちから、ようやく少しだけ理解できたような気がした。そしてそれから、ピカピカの靴をもう恥ずかしいとは思わなくなった。この六年間、私のために靴を磨き続けてくれた父に、私はきちんとお礼の言葉を伝えていない。だから、今度靴磨きをする父を見かけたら、思い切って「ありがとう。」を言ってみよう。感謝の気持ちが届くように……。